

こころの扉

私の卒業した学校には、ガラスケースに入った模型があります。私はその模型に特別の思い出があります。

私の高校では、3年生は文化祭で展示物を作ることになっていました。その年は誰かが持ってきた一枚のチラシをきっかけに、ある歴史的建造物の模型を作ることになりました。

制作パートを決めることとなり、じゃんけんで負けた私はAさんと二人で『かやぶき屋根』の担当になりました。私のクラスは、賑やかなクラスで活動的なメンバーが多く、休み時間も笑いの絶えない毎日でしたが、そんな中、誰とも話すことなくいつも一人で過ごしていたのがAさんでした。私もおとなしい高校生でしたが、そんな私から見ても、Aさんは人とかかわることが苦手なのだと思っていました。

「なんか気が乗らないなあ」と少し憂鬱な気持ちで作業を始めました。いろんな素材を使って作ろうとするのですが、二人はこれまで全く話したことがなかったので、うまくいきませんでした。

放課後の作業の時間になり、行き詰まった私たちは外に出て考えていると、Aさんは伸びているススキを茎から折って草笛を吹き始めました。突然のことにびっくりした私は「へえ～すごいなあ。教えてよ。」と言いました。「これはな、茎の部分を折ってな・・・」と言いかけて、Aさんは「あっ、これや」と声をあげたのでした。茎を使って屋根を作ろうと言い出したのです。

あたりのススキを数十本集めて教室に持ち帰り、同じ長さで切った茎を、ポンドで薄い板の上に貼ってみました。それを何枚か重ね、二人の屋根作りがようやく始まりました。

「何とか間に合いそうやね。」

「うん。」

「できそうで、よかったな。」

「うん・・・僕、3年間でクラスの子とこんなに話したの初めてや・・・」

「へえ、そうなんや。」

あれこれと相談しながら作業を進めるうちに二人で作業をすることが楽しくなってきました。

文化祭まで残り一週間となり、作業は大詰めとなりました。ススキを集めては短く切り、薄い板に並べてはそれを重ね合わせていきました。作業は遅くまでかかりました。一つ一つ時間をかけて仕事を進めていくAさんを見て、「Aさんは丁寧やなあ。」と言うと、Aさんは「僕は物を作るのが好きなんや。やっぱり物を作るのって楽しいなあ。」と答えました。

丁寧に一本ずつ茎を敷き詰めていきました。数日の間でAさんとの距離は急速に縮まり、最後に屋根の形を整えるために茎をハサミで揃える瞬間は二人で緊張に手を震わせながら切り揃えました。

「やったあ。」

文化祭前日、ようやく屋根は完成しました。クラスの展示物は、その年の最優秀賞となり、ガラスのケースに入れて飾られることになりました。

その後もAさんは教室に一人で居ることはありましたが、私にとっては大切な人となりました。

今も仕事から人と出会うことがよくあります。時には「苦手だなあ」と自分勝手なイメージで思い込みそうなことがあります。そんな時、Aさんと作った『かやぶき屋根』を思い出し「こころの扉を閉ざさないでおう」と自分に言い聞かせるようにしています。